



第 22 回

東西四大学合唱演奏会

第22回 東西四大学合唱演奏会

1973年 6月23日 6:30 P.M

6月24日 1:30 P.M

東京文化会館大ホール

主 催 東西四大学合唱連盟

御 挨 拶

本日はお忙しいところを、私達東西四大学合唱演奏会においで下さいましてありがとうございます。

今年で22回を迎えました我々の演奏会が、このように盛大になりましたのも、皆様の暖い御支援の賜物と深く感謝しております。

東西の代表的な大学合唱団である我々四大学が、ここ上野の森に一同に会し、各校の演奏はもちろん合同演奏までも唄いあげていくとき、部員一人一人が求めているものは演奏会以上の何かではないかと考えます。この精神をたてまえに創りあげていく今宵の演奏を、どうぞごゆっくりお聴き下さい。

最後にこの演奏会を催すにあたり、御援助、御指導をいただきました諸先生、関係者の皆様に厚く御礼申し上げるとともに今後の御鞭撻をお願いいたす次第でございます。

〈東西四大学合唱連盟〉

担当マネージャー

吉川 博 (同志社)
小久保 操 (早稲田)
白井 良秀 (関西学院)
赤沢 宗一郎 (慶應義塾)



演奏会に寄せて

同志社グリークラブ顧問
遠藤 彰

東西四大学合唱演奏会は今年で22回を数えます。この間、本邦男声合唱界でも風格のある演奏会として、一つの独自の伝統を造り上げてきました。

22年前といえば、わが国は外国の占領下にあり、欠乏と混乱の底で人びとはその日のパンのために苦しんでいた頃です。やがて高度経済成長の旗印が掲げられ、繁栄と豊かさの無制約的追求が凄まじい勢いで始まりました。そして、いま、この20年ばかりの日本社会の足跡をふり返るとき、私たちの心はいぜんとして虚しく満たされぬものを覚えます。物質的条件はその欠如にむいても充足においても、それ自体人間精神を充たし高揚させることはないからです。

音楽は高貴な精神の結晶です。人は優れた音楽を演奏し、美しい音楽を聴くとき、その魂はこの世の精神的荒廃にもかかわらず高く遠く飛翔します。私たちの四連は、精神の高貴さを失った激動の22年間、このような音楽の創造のために力を合せてきました。私たちの独自の伝統とは、つねに真実を追求してやまぬ学生の純粋さをもって永遠に連なる世界に羽ばたく歌を歌い続けてきたことにあるのでしょう。

こよいもまた、そのような歌をきかせてください。期待しています。

早稲田大学グリークラブ
副会長
上田 稔

今年で22回を迎えた東西四大学の演奏会がこのように盛大に開かれました事は、関係者として非常な喜びであります。

それぞれの合唱団は、それぞれ長い歴史と豊かな伝統を有する独自の合唱団であり、本邦におけるこれらの代表的男声合唱団があい集って共に技を競い歓を交わすことはまたそれぞれの合唱団に大きな刺激と収穫を齎さずにおかない。22年という年月を振りかえってみても混乱と紛争の中で声楽一筋にのびてきたこの東西四大学各校の軌跡に大きな誇りと自信がうかがうことができる。

今宵もまた、彼らが自れの貴重な時間を費して創り上げた「音楽」に惜しみない声援をお願いする次第である。

演奏会に寄せて

関西学院グリークラブ
顧問
東山正芳

今回第22回の東西四大学合唱演奏会が東京文化会館で開催されることになったのはほんとに喜ばしいことです。回を重ねること22回というのは相当なものです。

この時にあたって私の深く感じますことは音楽ことに合唱というものが人間と人間との心の交流に果す役割のどんなに大きいものかという感慨であります。関西学院グリークラブはこの4月4日から5月8日まで渡欧して、ポルトガル、スペイン、フランス、オランダ、イギリス、西ドイツの各地で演奏会をもってきました。第1回のヨーロッパ国際大学合唱祭への参加というポルトガルの招きを受けたからです。言葉の異なる諸国で音楽による合唱による交歓がどのくらいすばらしいものであるかをしみじみと味わってきました。この東西四大学合唱演奏会が心と心との交流を日本国中にひろめるものでありたいと思います。

慶應義塾ワグネル・
ソサィエティー男声合唱団
部長
千種義人

第22回東西四大学合唱演奏会を迎えた事を、心からお喜びしたい。アマチュア合唱界を代表する、同志社、関西学院、早稲田、慶應義塾の四大学が毎年一度、日頃養った、それぞれの力を持って演奏会を開く事は非常に意義深い事である。昭和27年9月に京都、大阪において第1回の演奏会が開かれて以来、回を重ねるごとにその実力を向上させ、20余年にわたって成長してきた。これを可能ならしめたのは、その時々々の学生諸君によって捧げられた音楽への情熱であろう。音楽に対するものは、単にこれを楽しむだけでなく、これを進歩させ、かつまた、これを通じて人間自身をも高揚させなければならない。相異った環境にある四大学の諸君が、日頃の練習の成果を交歓しあい、お互いに切磋琢磨しあう事は、今後のクラブ活動の上に、プラスになるだけでなく、ステージに立つ学生諸君1人1人の上にも大きな実りがあるはずである。合唱による芸術追求は容易ではない。しかしこの険しい道を、全人的な、真摯な態度と意気をもって歩まなければならない。

本日の演奏にあたり、御尽力下さった先生方、関係各位、並びに御来場の皆様に厚く御礼申し上げる。

エール交換

23日

関西学院
慶應義塾
同志社
早稲田

24日

同志社
早稲田
関西学院
慶應義塾

第 I 部

同志社グリークラブ

三声のためのミサ

- ・ Kyrie eleison
- ・ Gloria in excelsis Deo
- ・ Sanctus
- ・ Agnus Dei
- ・ O, Salutaris

作曲 アンドレ・カブレ
指揮 福永 陽一郎

早稲田大学グリークラブ

合唱組曲

日曜日ーひとりぼっちの祈りー

- I 朝
- II 街で
- III かえり道
- IV てがみ
- V おやすみ

作詩 蓬 萊 泰 三
作曲 南 安 雄
編曲
指揮 小林 研一郎
ピアノ伴奏 渋谷 るり子

第 II 部

関西学院グリークラブ

男声合唱組曲

航海詩集

- I キャプスタン
- II 船おそき日に
- III わが窓に
- IV コンパスづくし

作詩 丸 山 薫
作曲 多 田 武 彦
指揮 金 房 哲 三

慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団

シベリウス合唱曲集

- I Sortunut ääni
- II Terve kuu
- III Venematka
- IV Työnsä kumpasellaki
- V Metsämiehen laulu
- VI Sydämeni laulu

作曲 ヤン・シベリウス
指揮 木 下 保

第 III 部

合同演奏

男声合唱組曲

海の構図

- I 海と蝶
- II 海女礼讃
- III かもめの歌
- IV 神話の巨人

作詩 小林 純一
作曲 中 田 喜 直
編曲・指揮 福永 陽一郎
ピアノ伴奏 三 浦 洋 一

「日曜日」

私の幼い日々、父や母と共に過ごした日はやはり日曜日であった。そんな日の朝、眼を覚ますと、父は茶の間で新聞を読んでいた。母は父に茶を勧めていた。父は、私の起きたことに気がつく、「さあ、約束どおり、ドライブに行こうか」と私によく声をかけたものであった。のどかな、胸はずむ日であった。父や母に私という存在を知らしめる、大切な機会の日でもあった。そして、その日は、私を中心に動いて回る。私そのものの日でもあった。そうした日曜日の印象は誰もが持っているものであり、又誰もの記憶にいつまでも留まっている、なつかしき日々ではなからうか。しかし、そんな日が突然失われ、父や母が永遠に帰らぬ人となった時、果してもとの日曜日という日を、我々は如何様に眺め得るであろうか。又、我々は、その悲しみに如何様に対処するであろうか。作品「日曜日」はこの課題に向かって突き進む。更には、交通事故の加害者の子供という罪の意識を背負いつつ、社会の圧迫に苦しみ、悶えるその子供の姿を、大阪弁という人間臭い、言葉のリズムを用いて描いていく。

この作品のオリジナルは混声合唱であったが、新たに男声合唱に編曲、男声のダイナミックな動きを根幹にして、子供にとって、ひいては親子にとって、日曜日というその日が如何なる位置にあるかを問うている。

なおこの作品は昭和45年度芸術祭優秀賞を受賞した。

日曜日～ひとりぼっちの祈り～

1. 朝

蓬萊泰三

お父ちゃん はよおきや
ええ天気やで 青空やで
はよおきなんたら こそばすで
ふとんめくるで 鼻つまむで
はよ はよ はようおきいな
日曜日やで やすみやで
どっか 連れてってえな
なあ なあ なあて お父ちゃん!

お母ちゃん おけしょうまだか
おべんと持ったで 服きたで
はよせなんたら おいとくで
なんにもせんかて きれえやで
はよ はよ はようしてえな
どないしたかて いっしょやで
はよせな 昼になるやんか
なあ なあ なあて お母ちゃん!

けど
もう
お父ちゃん いてへん
お母ちゃんも いてへん
けど
やっぱり
日曜の朝になったらくり返す
ひとりぼっちの
ひとりぼっちの ぼくの
ひとりごと……

——あっという間に いっぺんに
クルマといっしょに 死んでしもた
ショウトツジコで がけからおちて
死んでしもた……

ひとりぼっち
ひとりぼっち
そやから そやから
ぼくは
ひとりごと……

お父ちゃん はよおきや
お母ちゃん おけしょうまだか
ええ天気やで 青空やで
おべんとう持ったで
服きたで……

2. 街で

はしる はしる はしる
クルマ クルマ クルマ
日曜のこうサテン
ぼくのまわり
はしる はしる はしる
クルマ クルマ クルマ

のってるおっちゃん
よそのおっちゃん
わろてる
わろてる
わろてる

さがしてるのやあらへんぞ
死んだお父ちゃんなんか
さがしてるのやあらへんぞ
たいくつやさかい
見てるだけやわい

たべてる たべてる たべてる
カレー うな丼 スパゲッティ
デパート八階 大食堂
ミツメ お子さまランチ
クリームパフェ

たべてるおばちゃん
よそのおばちゃん
わろてる
わろてる
わろてる

さがしてるのやあらへんぞ
死んだお母ちゃんなんか
さがしてるのやあらへんぞ
たいくつやさかい
見てるだけやわい

まわる おどる はしる
回転木馬 ゴーカート モノレール
デパートの屋上ひろば
まわる おどる はしる
マジックガン ミニロケット

のってる子
よその子
わろてる
わろてる
わろてる

前にのったわい
なんぼでも 前にのったわい
うらやましきことなんかあらへんわい
たいくつやさかい 見てるだけやわい
ほっといてんか!

——なんでや!? なんでやねん!?
なんでそないに ジロジロ見るねん!?
おったらいかんのか!?
見てたらいかんのか!?
なんで!? なんでいかなのや!!

3. かえり道

あそんでる
みんながいっしょにあそんでる
かえり道
見て見ぬふりして
まわり道

そやのに みんなが追ってくる
みんなの声が追ってくる

ヒトゴロシノコ
ヒトゴロシノコ
ヒトゴロシノコ
ヒトゴロシノコ

ちがうわい ちがうわい ちがうわい
ぼくのお父ちゃん ええ人やったわい
ちがうわい ちがうわい ちがうわい
なんぼなと言え へっちゃらわい!

ヒトゴロシノコ
ヒトゴロシノコ
ヒトゴロシノコ
ヒトゴロシノコ

はしりとないのに はしてしまふ
耳をおさえ 目をつぶって
はしてしまふ
ああ……!

ヒトゴロシノコ
ヒトゴロシノコ
ヒトゴロシノコ
ヒトゴロシノコ

あほ ばか まぬけ 柿のへた!
あほ ばか まぬけ 柿のへた!
前にビー玉やったのに
チュウインガムもやったのに
マンガの本かてやったのに
はくじょうもん! うらがりもん!
ヒトゴロシノコ
ヒトゴロシノコ
ヒトゴロシノコ
ヒトゴロシノコ

はしるな はしるな ぼくのあし!
あるけ あるけ ぼくのあし!
プロレスみたいに
ヨコヅナみたいに
あるけ あるけ あるけ!
はしるな はしるな はしるな!
とまれ とまれ とまれ ぼくのあし!
はしるな はしるな はしるな!
とまれ とまれ とまれ とまれ!
——お父ちゃん!
なんで!? なんでお酒のんで運転したんや!?

4. てがみ

はいけい
こんにちは
あしのおけがは どうですか
ぼくは きみとこのクルマに
ショウトツジしたヒトの こどもです
きみは きつと
おこつてはるやろと おもいます
ぼくのお父ちゃんのこと
ものすご おこつてはるやろとおもいます

お父ちゃんが お酒をのんで
追いこしなんか せなんたら
きみも ひとりぼっちにならんですんだです
あしも けがせんですんだです

かんにんしたげてください
ぼくのお父ちゃんを
かんにんしたげてください

もし きみが
一生びっこになって
はたらけんようになったら
ぼくがペンションします
うんと はたらいて
お金をためて……

お金もあげます
家もあげます
ごちそうもあげます
きつとちかいます

そやから
どうか
ぼくのお父ちゃんを
かんにんしたげてください
おねがいします
おねがいします
おねがいします
さようなら……

5. おやすみ

ねんねころいち
お父ちゃん ねたか
星から ぼくが見えてるか
お酒のみなや
おとなしいにしいや
天のカミサンに おこられるで……

ねんねころいち
お母ちゃん ねたか
あんまり お父ちゃんいじめなや
けんかしいなや
仲よろしいや
天のカミサンに わらわれるで……

ねんねころいち
お父ちゃん おやすみ
お母ちゃん おやすみ
仲よろしいや
仲よろしいや
それで 天国へ行かしてもらいや
ねんねころいち
おやすみなさい
またあした
またあした……

都の西北

相馬御風 作詞
東儀鉄笛 作曲
山田耕禰 編曲



曲 目 解 説



男声合唱組曲「航海詩集」

この組曲は、詩人丸山 薫が昭和16年太平洋戦争勃発前に、中央公論社特派員として、練習船海王丸に便乗して数ヶ月間南方海上を帆走して帰り、18年その印象をまとめた詩集「点鐘鳴るところ」から、四篇を選んで作曲された。特に「海上生活の色々な情景をとらえている詩であると同時に、合唱曲として作り易いもの」を選んでいる。

- I キャプスタン** キャプスタンと云うのは、甲板の上にある轆轤で船員達が、帆索をまいて廻している情景をうたっている。曲は2拍子の少しかたいリズムに乗って力強く歌わる。巧みにリビートしてあっさりと終っている。
- II 船おそき日に** 船旅の、とある退屈な一日。白い海鳥の気紛れな動きや、船員達の声がうつろにきこえる様子を何もやりきれない退屈な気持ちで歌う。
曲は緩、急、緩、急、緩のテンポをとって居り、最初の部分は波間に浮ぶ鳥の様子をゆったりと単調に歌い次の部分でその単調さを破って鳥の飛び去る様子が歌われ再び単調に最初と同じ情景を歌う。次の部分ではや、軽快に船員達がふなあしをかぞえる有様をかけ声をうまくおりませて歌い最後に最初の速度で船旅の物憂い、さびしい感じを歌っている。
- III わが窓に** 船窓から見る海上の様々な景色の移り変りを単々と歌って行く。静かな中にもスケールの大きい船旅の気分を表わしている。
曲はゆったりと大きな流れに乗って美しいメロディとハーモニーを保ちつつ動いて行く。
- IV コンパスづくし** スタンダードコンパス： 普通一般に呼ばれる羅針儀
スチレヤイヂコンパス： 舵輪の所にある羅針儀
ポートコンパス： ポートに乗る時に持つ、遭難用の羅針儀
チャイロコンパス： 電気仕掛の正確な羅針儀
これらの色々なコンパスに対する作者の愛着心を単々と歌い上げ組曲を終曲に導びいて行く、曲は早く、諧謔的に歌われる。
この組曲に於てはきめ細かさよりもむしろ男声合唱特有の力強さ、大きさ、等が要求されているし、全曲を通じて海上生活の独特な味わいも要求されている。

航 海 特 集

丸 山 薫

I キャプスタン

キャプスタンに
帆索を巻いて
よいさ こらさ と
廻はすのだ

キャプスタンの
バアを振りあげ
釣り上げた
蟻の頭を殴るのだ

キャプスタンに
片あぐらかき
けふも老水夫長が
唄っている

キャプスタン！
いまはむかし
そんな名の舶来烟草も
あつたけ

II 船おそき日に

白い海鳥が
航跡の泡に泛んでゐる
ゆらりゆらりと

ふいにそれは舞ひ上る
メインマストよりも高く
太陽にひるがへて鳴いて
何処かへいってしまふ

しばらくすると肖た海鳥が
おなじところに泛んでゐる
ぶかりぶかりと

船尾で若者達が
ログラインを手繰りながら
船脚を読んでゐる

ひとつ ふたつ
みつつ よつつ……

私は知っている
海鳥はたつた一羽だ

III わが窓に

わが窓に
三十日ほどは
太平洋の空映りぬ
湧く雲の
はげしきひかり映りぬ

わが窓より
十日がほどは
コロンス島の翠見えぬ
無数の戎克の
涼しき帆影見えぬ

わが窓を
七日ほどは、あらし
東支那海の颱風叩きぬ
しぶける雨と
灰色の巨浪叩きぬ

わが窓は
五十日ほど
わが旅の窓に疊れり
疊れるかなた
人魚 ひらめきて泳ぎぬ

IV コンパスづくし

船でおぼえた四つのコンパス
スタンダードコンパス
スチレヤイヂコンパス
ポートコンパス
チャイロコンパス

もっと説明するならば
スタンダードは船橋に
コンパス仲間の総元締
お次のものは舵輪の前
船の針路を決めるコンパス

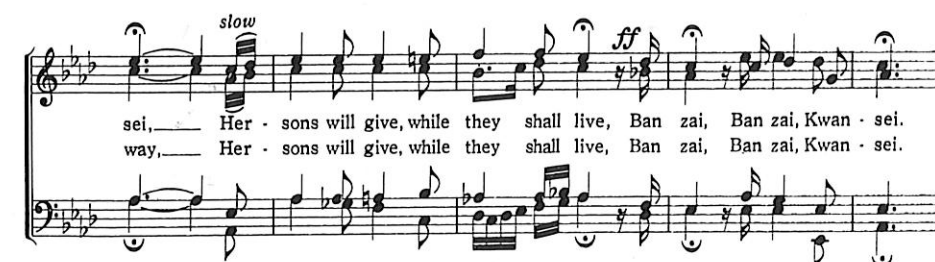
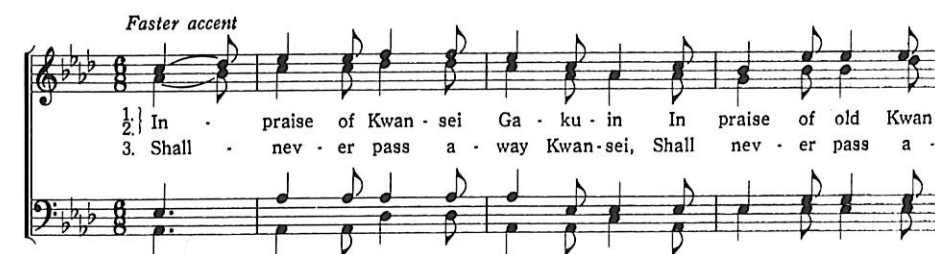
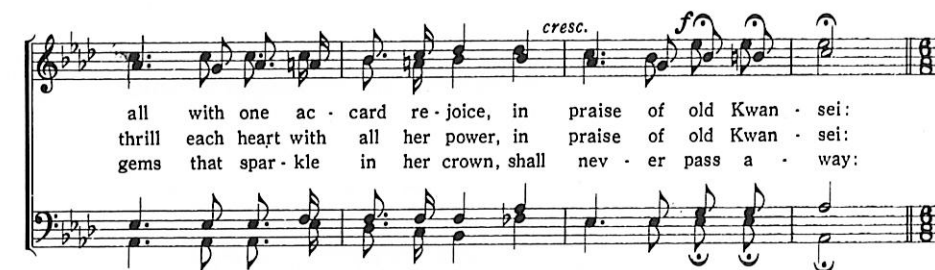
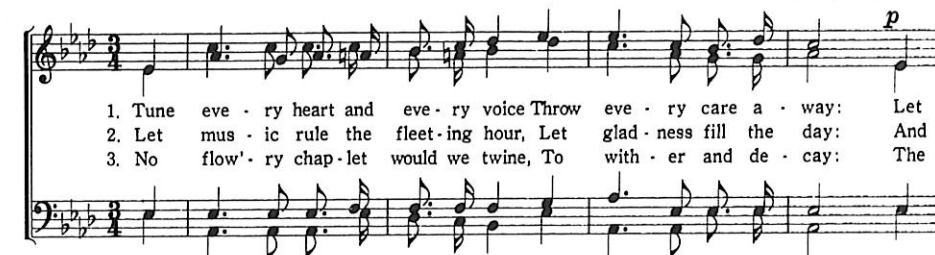
その名どほりの三番目
ボートに吊げて乗り移る
遭難用の不吉なコンパス
ふだんは倉庫におさまってる
さて どんじりが下甲板

機関室のとなりにゐる
電気仕掛の独楽応用
正確無比のチャイロ親分
さうさう忘れたもう一つ
変った奴が船長室

ベットのまうえの天井に在る
タバコぶかぶか船長が
臥ながら眺める話せる相手
その名も可愛いテルテルコンパス
その名も可愛いテルテルコンパス

Old Kwansei

林 雄一郎 編曲





シベリウス《六つのうた》

シベリウスの音楽は、とても良い音がする。彼は管弦楽法の天才で、オーケストラで楽想を綴るときに一番生彩を放った。しかも、ドイツ後期ロマン派の巨匠達のように、大編成のオーケストラを用い、その偉力で表現するのではなく、節約された簡素な編成を用いて驚くばかりの豊麗な効果をひき出している。合唱曲は、管弦楽曲に比べ、はるかに規模の小さいものである。しかし、その音のすばらしさは管弦楽曲にひけをとらない。それどころか、シベリウスの音感覚の最良の結晶といった感じさえる。

北吹は合唱のさかんなところである。特に、フィンランドには合唱曲に適わしい優れた詩が古くからたくさんあり、シベリウスはこれらを題材に多くの合唱曲を書いた。その中には、管弦楽や独唱を伴う大曲もあり、素朴で簡素な小品もある。また、男声と混声が多く、女声が極めて少ないことは興味深い。

《六つのうた》op. 18は、1901年頃書かれたものであるが、同時代の交響作品がまだドイツロマン派の強い影響の下にあるのに比べ、合唱曲では、後年に確立されるシベリウス独自の世界が早くも表われている。

曲はいづれも民族色豊かなものであるが、それは他の作品と同様、生の民謡をそのまま素材としたのではなく、フィンランドの神話、歴史、自然、民族の息吹きなどから啓示をうけた精神を、靈感によって昇華させて発想の根源とし、そこから新たに生み出されたものである。

テキストは、《カンテラル》、《カレワラ》、そしてキウイの詩からとられている。19世紀、ヨーロッパに民族主義がおこり、フィンランドでも自国の伝統文化に多くの目向けられたが、その中でも、民衆の間に広く口伝されていた詩は、人々の注目を集めた。《カンテラル》とは、そういった詩の中から抒情詩を集めたものであり、《カレワラ》とは、フィンランド建国の叙事詩を集めたもので、フィンランド民族独立の心のよりどころとなり、あらゆる芸術創作の源となっているものである。キウイは、フィンランド近代文学の祖といわれる人で、多くの詩や戯曲を残している。(演奏に際し、御協力下さいましたフィンランド大使館の皆様方に厚く御礼申し上げます。)

- | | |
|-----------------------------------|--|
| I Sortunut ääni
(失われた声) | 希望を失ない、悲しみによって声が枯れてしまったことをせつせつと歌う。カンテラルを吟詠するときのリズム、メロディーがそのまま生かされている曲である。
(カンテラル) |
| II Terve kuu
(月よ御気嫌よう) | 魔女に捕えられていた月と太陽は、英雄ワイナモイネンの手で再び空に昇った。それを見てあいさつを送り、国に幸多かれと祈る歌。
(カレワラ第49章) |
| III Venematka
(船の旅) | 英雄ワイナモイネンが、国を幸福にするため、船にのり魔女のところへ魔法の白をうばいにでかけるとき陽気で勇ましい歌。
(カレワラ第40章) |
| IV Työnsä kumpasellaki
(二人の仕事) | 愛し合う二人の若者の会話。男は焼き畑を作るのが仕事であり、女は金銀の美しい布を織るのが仕事である。
(カンテラル) |
| V Metsämiehen laulu
(森の男の歌) | フィンランドは森の多い国である。森の生活の楽しさを歌った歌。
(キウイ) |
| VI Sydämeni laulu
(わが心の歌) | 子に先立たれた親が、死者の国でもわが子が幸せであるようにと祈り、自らの慰めとする。
(キウイ) |

シベリウスの演奏に際して

木 下 保

学生諸君の発案で、此度シベリウスの作品18の《六つの歌》を演奏することになった。日本でフィンランド語で合唱する。珍らしいことである。学生にとっても初めての経験であろうし、私としても初めてである。

わが国ではフィンランドの文化に接する機会は、比較的少なかったように思える。特に音楽界では、偶にシベリウスの交響曲が聴ける位のもので、歌に接することは非常に少なかったのではないか。

私がフィンランドの歌に興味を持ちだしたのは、昔々のドイツ留学時代にキルピネンの歌曲を勉強し、演奏してからであった。同時に、シベリウスの歌曲数曲も含まれていた。

フィンランド語は、ハンガリーのマジャール語と共に、日本語と関係の深い系統の言葉で、語彙や響きが似ているので、私は何となく親近感をおぼえたのである。

残念乍ら、私は一度もフィンランドを訪れたことがない。然し、ハンガリーは、留学時代にラジオの仕事や演奏会のことで三回訪れた。その都度、言葉の内容は理解できないまま、音楽会の幕間の会衆の会話の響きが、日本のそれと殆んど同じであり、特に街角で遊ぶ子供達の叫ぶ響きが、日本の子供達と余りに似ているのに驚いた記憶がある。これを思うとき、恐らく、フィンランドの民衆の会話の響きや子供達のざわめきは、ハンガリーや日本のそれと似ているに違いないと想像するのである。

此度、シベリウスの男声合唱曲を学生と共に勉強してみても、益々その感を深くした次第である。と言っても我々日本人にとって容易な言葉であるとは言いがたい。何故かなれば、フィンランドは西欧諸国の文化の影響を多分に受け、日本とは歴史的背景が余りにも違い過ぎるからである。

何はともあれ、出来得る限りの努力をした演奏を、同情を持った拍手で迎えて頂ければ幸いである。

慶 應 義 塾 塾 歌

富田正文 作詞
信時 潔 作曲
北村協一 編曲

♩ = 104 力強く



(昨年、同志社校内にて)

木 下 保 古 稀 記 念 演 奏 会

11月 4 日 (日) 東京文化会館大ホール

日本女子大学合唱団

聖心女子大学グリークラブ

慶應義塾ワグネル・ソサイエティー男声合唱団

お問い合わせ

03 - 361 - 1623 遠藤 和人



三声のためのミサ

福永陽一郎

アンドレ・カブレは、作曲家として大家の列にはいないけれども、ドビュッシーの弟子であり、しばしば師の作品の未完部分の完成者として、また協同制作者として、編曲者として、ドビュッシーの伝記や作品表や作品研究論文に出てくる名前である。ドビュッシーの「聖セバスチアンの殉教」の完成に際しての協同者として必ず言及されるし、元来、ピアノ連弾曲である「小組曲」の管弦楽用の編曲は、カンドレ・カブレの、ほとんど代表作であって、もっとも多く、プログラム上に名前をあらわすケースとなっている。もうひとつの代表作が、デュラン社から出版されて、世界中でポピュラリティを持つに至った「三声のためのア・カペラのミサ」である。

いつの年代の作品か、よくわからない。ア・カペラというのは、無伴奏という意味と同時に、礼拝の実用と共にされるように書かれているという意味も持つらしい。

ソプラノ、メゾ・ソプラノ、コントラルトのために書かれた三声部のミサ曲で、ごく少い部分に四声部が用いられている。女声合唱よりも少年合唱をあてにしていたような、メロディ線の強靱さがあり、スコアにも、テノールとバリトン、およびベースという声部の指定も加えられていて、男声合唱でうたって、いっこうに差しつかえない作品である。日本での初演は二十年ばかり前に、関西学院グリークラブによってなされた。女声合唱による初演は、慶応ワグネルの女声合唱団がおこなった。

フォーレにはじまり、現存のプーランクに至る近代フランス音楽の流れの中で、カブレのこの作品も、形式的、様式的に、二十世紀初頭の音楽的傾向を、色濃く反映している。形式的には、ミサ典礼文のうちの「クレド」を欠く。これは、フォーレやデュルフレの「レクイエム」に「怒りの日」が欠け、プーランクの「ト調のミサ曲」に「クレド」が欠けているのと軌を一にしている、近代フランスのカトリック教会での礼拝形式との合致を示している。

様式的には、調性がないわけではないが、きわめて流動的であり、エンハーモニックな転調が次々とあらわれて、一種、とりとめない印象を残す。これは、ドビュッシーを旗頭とする印象主義派の音楽の一般的な作曲技法で、古めかしくもなければ、新しすぎもしない点で、共感を呼びやすい。

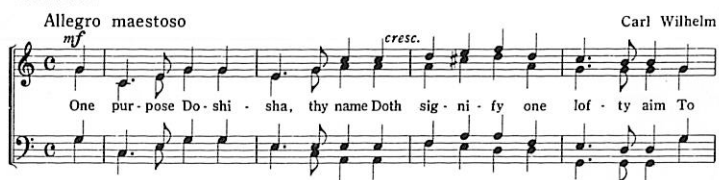
さすがにカトリックの伝統の長いフランスにあって、ミサ曲の源流は、基本的にグレゴリア聖歌から発生したものであり、ポリフォニーの外画は、すぐにホモフォニーの世界の流入するが、しかし、どの場合でも、横の流れが主導権を持っていて、ハーモニーの固定がおこることはない。ハーモニーが、主三和音の連結で終止することもない。

曲のはじまりのテンポの指定が「ちょっと急いで」であるのに三小節いったところで「ゆるめて」という指示があり、五小節目は「おそく」、そしてそのわずか二小節後に、「おそさを減らして」とくる。つまり、一定のメトロノミックなテンポの維持は、なされ得ないように書かれている。

全曲を支配しているのは、音楽の流れの「自由さ」であり、アンサンブルが「自由さ」を獲得するのは至難のわざであるが、今年度も小人数の合唱を強いられている同志社グリークラブは、小人数であることを逆手にとって、条件を有利なものと考えて、昨年度、男声合唱としては極度のデリカシーを追及したのと同様、今年、その「自由さ」を求めて、楽曲を手中におさめようとしているのであるが、目的が達成できれば幸いである。

Doshisha College Song

W. M. Vories



「海の構図」と私

福永陽一郎

合唱組曲「海の構図」は、NHKの委嘱により、1961年に作曲されたもので、「現代音楽・日本曲集」の時間に、田中信昭の指揮する東京混声合唱団（ピアノ・田中瑤子）により放送初演されたもので、言うまでもなく混声合唱曲である。

この組曲の出版が、1966年に作曲されたもうひとつの秀作、混声合唱とピアノのための組曲「都会」よりおくれたのは、混声合唱の機能の生かしがたにいくらかの問題点を持っていることが演奏も困難なものとし、内容的には詩と良く結びついた音型が美しく、またたくましく提出されてはいるが、声部と声域の関係から楽譜を視覚的に見るときほど現実の音として効果をあらわさない部分が散見されたからである。この組曲の第四曲「神話の巨人」をうたった池田明良指揮のアルベルネ・ユーゲントコールがコンクールで優勝してから、人々の要求が高まり、「都会」の好評なども力となって、やっと1968年に出版のはこびとなった。

私は、そのアルベルネ・ユーゲントコールがうたうのを聴いた最初から、この音楽が、むしろ男声合唱を音素材とするほうが、より大きくその良さを発揮するのではないかと考えていた。また、たまたま混声合唱団でこの曲を指揮する経験を持ったとき、その考えは確信となり、早くから作曲者の許可を得て、男声合唱用に編曲する機会をねらっていた。もともと、この曲は男声合唱によって開始されるのである。それもひとつのヒントとなった。また女声の声部が、かなり低い位置に書かれていることも、そのまゝの響きを男声のみで再現できることになり、編曲をやりやすくした。

混声合唱曲を男声に編曲するときは、何音が高く移調するのが常識であるが、中田喜直の作品のピアノ・パートは作品の立脚点であって、そこに変更を加えることは作品自体の破壊になるので、伴奏部分は、いっさい手を加えていない。

私のもっとも好きな部分は「神話の巨人」のコーダとも言うべき部分で、まさに「海」というもののイメージを確実にとらえた音楽であり、夕映えの光景を眼底にありありとうつつし出すような音楽のクライマックスは見事というほかはない。

1970年8月に完成された男声合唱用の編曲は、第19回東西四大学の合同演奏曲として私の指揮で初演される筈であったが、急病のため北村協一君の手をわずらわせることになった。練習がかなり進んだのちの交替で、あちこちに迷惑をかけたことだろうが、キング・レコードに残されたその演奏は、指揮も合唱も伴奏も満足すべきものである。

客観的に聴くことができたので、もとのイメージとのズレや、十分に効果的な書きかたをしていない部分に気がつき、また、出版されている混声の楽譜にのこっているミス・プリントのそのまゝの転写や、男声合唱譜制作課程でのミスも発見された。そこで、改訂版をつくって、部分的な修正を加えた。北村協一君の欧米外遊中ということもあって、失礼の段も許してもらえらうと、あえて再演に踏みきった。べつに、前の演奏に不満があつて、今度こそはという意気こんだつもりは無い。

四大学それぞれの人数の減少は、各合唱団の演奏に、デリカシーのセンスが加わったというプラス面を持っている。「海の構図」の音楽は、決して、かつてのような三百人の大合唱でうたうものではない“こまやかさ”を持っているが、同時に、百人以下では出せないスケールの大きさもある。今の時点の合同合唱に、ちょうど合うのだろうと考えている。

海の構図

小林純一

I 海と蝶

海よ、海よ、
あなたの表情は、
どういう時が、ほんとうなのですか。
きょうの、その、
くすぐったそうな表情！

空の青さが 色あせたからといって、
あなたのせいではないでしょう、
空の方から溶けこんだのです。

風が音色を失ったからといって、
それも あなたのせいではない、
じぶんで 波間に消えたのです。

海よ、海よ、
あなたの表情が、しかし、
きょうのような日に、
地球のどこかで、
小さな、黄色い蝶が一匹、
こっそり生まれているのです。

海よ、海よ、
あなたの、その子もり歌をつづけてくださ
い。

……ういん、ういん、るいん、るいん。
ういん、ういん、るいん、るいん。

II 海女礼讃

人魚の姫にたとえられて、
海の少女は くっくと笑ったが、

瞬間、ほころびた口もとに真珠が輝き、
黒髪を 海草の匂いがつつんだ。
そうして、まぼろしのように海底に消えて
いった。

ああ、人魚でなかったら
なんだというのだろう、
あの美しい海の少女は。

また、飛天の像にたとえられて、
海の少女は くっくと笑ったが、
瞬間、口もとをのめる息が笛の音となり、
はだえを七色の虹がつつんだ。
そうして、天翔る姿そのままに海底に消え
ていった。

ああ、飛天の像でなかったら
なんだというのだろう、
あの美しい海の少女は。……

III かもめの歌

かもめ、かもめ、
ひもすがら、
なみの まにまに、まう かもめ。
かなしき さがよ、
ひもすがら、
うねりのまに、まう かもめ。
ゆらゆらと、ただ、ゆらゆらと。

かもめ、かもめ、
しおぎいの、
うたに あわせて、まう かもめ。
かなしき さがよ、
しおぎいの、
うたうがまに、まう かもめ。
ゆらゆらと、ただ、ゆらゆらと。

IV 神話の巨人

その頃、
海は孤独な巨人だった。
鉛色の頭髪をかきむしり、
狂暴な叫び声をあげて、
のたうちまわってばかりいた。
うおーん、どどどどーん、
うおーん、ざざざざーん。

竜が、暗い天へ登っていった。

神にも、サタンにも、
巨人の気むずかしさを
どうすることもできなかった。

今でも ときどき、
海は孤独な昔にかえる。
鉛色の頭髪をかきむしり、
狂暴な叫び声をあげて、
ただ、のたうちまわる。
うおーん、どどどどーん、
うおーん、ざざざざーん。

そんな時、
人間はただ、
巨人の疲れはてて寝入るのを待つしかない。

ああ、
神話の巨人は今、
何を考えているのだろうか。
夕焼けに映えて、
少女のように無心に赤いリボンをひるがえ
しているが……。

……ういん、ういん、るいん、るいん、
ういん、ういん、るいん、るいん。

指揮者のプロフィール



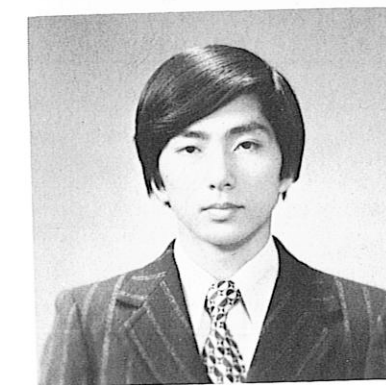
福永陽一郎



小林研一郎



木下保



金房哲三

1926年 神戸に生れる。東京音楽学校（現芸大）本科ピアノ科出身、1951年藤原歌劇団に入団、ピアニスト、副指揮者、合唱指揮者として経験を積む。1956年～65年藤原歌劇団常任指揮者として活躍、同団の第三次渡米公演に同行。アメリカ、カナダの主要都市での公演を指揮した。1959年、61年、63年、67年イタリア・オペラ来日公演には副指揮者、合唱指揮者として参加。歌劇指揮者として、レパートリーは50数種のオペラを持ち、日本屈指のベテランである。

合唱音楽に関して経験が深く、合唱界の第一人者の一人である。1952年、畑中良輔氏と共に、東京コラリアーズを創立、日本最高のプロ男声合唱団に育てた。アマチュア・コーラスに対する理解と情熱も過去二十年間、断絶することなく持続され、客演指揮、合唱講習会の講師、コンクールの審査員として、全日本的に活躍。又、合唱用の編曲作品は数百曲に及ぶ。

乗っている車……フェアレディ 240Z

顔……いわゆる「もてる顔」の部類に入る。

運動神経……スキーの平行をわずか7日間で修得し、昨年の六連野球大会ではその本領を発揮して、早稲田を輝しくも5位に甘んじさせ、はたまた福島県の高校百米記録を保持しているというほど、抜群のすばらしさ。

練習中……その目は獲物を狙うヒョウの如し。

「以上のことは必ず書け、さもないとお前を一人だけで歌わせるぞ。」と合宿中に小生をおどしつけた人が、わが早大グリーの常任指揮者、音楽監督である小林研一郎先生なのです。その厳しい練習、その若さは常に我々を引きつけ、音楽に対するやる気を起させてくれます。東京芸術大学作曲科、指揮科を卒業、昨年5月にデビュー以後、精力的な活動を続けられ、7月10日と9月4日には東京交響楽団のエースコンサート

のステージも予定され、増々前途洋々といったところです。我々は常に若さを持ちあわせた小林先生に、大声援を送りたいと思います。

明治36年10月14日兵庫県豊岡に生れる。大正15年、東京音楽学校を卒業。昭和3年同校研究科を修了される。在学中はネトク・レーヴェ氏師事された。昭和8年から10年まで、ドイツ、イタリアに留学され、ドイツではバイセルボン氏に師事された。帰国後は、母校の教授として教鞭をとられるかわら、リート歌手として活躍された。辞任後はオペラにも進出され、「タンホイザー」・「ローエングリン」など、数多くオペラの初演を手がけられた。又「夕鶴」などに代表される日本の歌曲に対しての非常に卓越した解釈は、他の追従を許さない。現在では、洗足学園大学教授、大阪音大講師として、又、東唱、日本女子大、聖心女子大など、プロ・アマの数々の著名な合唱団の指揮者として文字通り東奔西走の御活躍をなさっている。

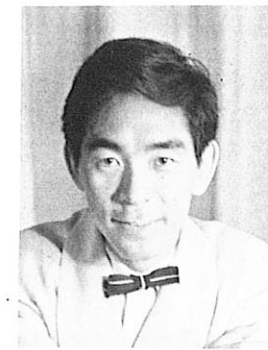
ワグネルは先生が音楽学校在学中より30余年あまりお世話になっており、その御尽力により慶應義塾の名譽塾員になられた。

1951年、大阪市に生れる。関西学院高等部時代よりグリーに親しみ、その指揮者として活躍。現在、関西学院大学経済学部4年、グリークラブ渡欧学生指揮者。指揮法を常任指揮者北村協一先生に学ぶ。尚今回の四連では、北村先生が渡欧留学中のため、久々の学生指揮者の登場となった。

<部員より一言>

“情熱の男” その言葉がふさわしい彼は一日数時間においても、たびたび休憩を忘れる程である。しかし、それについて行くグリーのメンバーは、彼の精神的音楽に引き込まれ、充実感に満ちあふれるのである。

伴奏者プロフィール



三浦洋一

1955年、東京芸術大学ピアノ科卒業。

1956年、同専攻科卒業。

ピアノを遠山つや、ハンス・カン両氏に師事。その豊かな音楽性と、卓越したテクニックには、多くのファンがあり、現在、ステージ、録音、外来音楽家との共演と、東西に広く活躍されている。



渋谷るり子

早稲田とのおつきあいは、先月の六連以来。

1953年仙台市生れ、花も恥らう20才の乙女なのであります。現在、東京芸術大学ピアノ専攻の3年生。その確かな腕で今宵は我々の伴奏をして下さいます。練習中、小林先生から伴奏についての指摘があると、「ハイッ」と返事をして、そのときにクリクリッと動く目がなんともかわいらしいと、グリー内でもっぱらの評判。はやくもグリーあこがれの的という噂もなきにしもあらず。今宵の演奏を共につぐっていく我々の仲間です。

早稲田大学グリークラブ第21回定期演奏会

12月1日(土) 渋谷公会堂

2日(日) 厚生年金会館大ホール

両日とも 6:30 P.M. 開演

お問い合わせは…早大グリー事務所 Tel.(202) 0903

慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団第98回定期演奏会

12月8日(土) 郵便貯金会館ホール

12月9日(日) 東京厚生年金会館大ホール

曲目

「運命の歌」

作曲 ブラームス

「シベリウス合唱曲集」

作曲 シベリウス

指揮

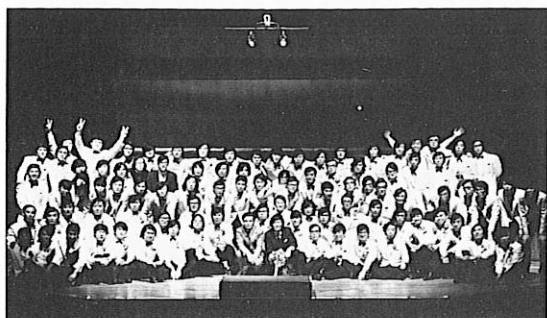
木下 保、畑中 良輔、伊東 健光

クラブ紹介

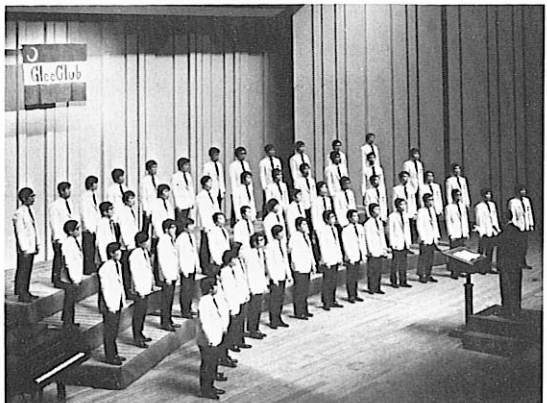
同志社グリークラブ



早稲田大学グリークラブ



関西学院グリークラブ



慶應義塾ワグネル・ソサイエティー男声合唱団



我が同志社グリークラブは、来年創立70周年を迎えんとし、その目的たる「同志社精神を載し、メンバー相互のメンタルハーモニー・カレッジライフの向上」に不断の精進を続けております。

明治44年、それまで賛美歌を歌う聖歌隊的なものであったのが、正式にグリークラブと名づけ組織化されて以来、常に真摯な音楽追求の場として在り続け、今日に至っております。1000名に近い先輩の中には現在も音楽界で活躍中の方々も数多くあります。

大学4年間のグリーライフを紹介すると新入部員はまず4月から夏休みまで、「Fresh」と呼ばれ、同志社の向いにある京都御所の芝生の上で、グリーの一般教養を教えられます。この御所時代を終えると、夏の合宿で4年生から洗礼を受け晴れて「Old」の仲間入りをします。時には挫折しそうになりながらも「音楽」という底知れない不思議な世界をかい間見ては、又新しい意欲に燃え、日常の持ち物の半分以上が楽譜であるという生活を4年間続けるのです。そして、歌というものが、少し解りかけて来た頃、「Farewell Concert」で先生や下級生に送られてグリーを去って行くのです。

現在、福永陽一郎先生を技術顧問、大久保昭男先生をヴォイストレーナーとしてお迎えし、より高度な音楽の創造をと努力しております。

昨年第20回の定演を迎えた我々早稲田大学グリークラブも、その始りは大正年間にありそろそろ50年をすぎようとしています。現在、週3回の練習にやってくるクラブ員達は、この長い歴史と伝統をふまえて、新たなハーモニーを作り出そうという意欲に燃えています。これこそは、諸先輩が長いあいだ受け継いできたグリーの一貫した精神でしょう。

部員総数100余名の大世帯、この一人一人に適切な指導をして下さるのが、小林研一郎先生であり、ヴォイス・トレーナーの金谷良三、築路文夫の両先生なのです。

良き指導者そして数多くの良き先輩達のもとで、私達はクラブの成員である自分を自覚し、毎回の練習に励んでおります。今宵はどうかその成果をお聞き下さい。

関西学院グリークラブがわが国最古の男声合唱団として誕生したのは、1899年のことでした。以来74年間、学院の宗教的雰囲気と内外の暖かい御指導、そして何よりも歌うことの好きな幾多の先輩達の努力によって、はぐくみ育てられてまいりました。私達は、この長い歴史の中で、たった4年間しか在籍することが出来ませんが、その間の一つ一つの行事を常に大切に、輝かしい一ページを作り上げようと不断の努力を重ねております。

移り変わりの激しい現代社会において、一つの団体の確固たる形態を維持することは容易ではありません。関西学院グリークラブも又、その例外ではありません。時の流れと共に日々変化しつつあります。しかし、その中でただ一つ「メンタル・ハーモニー」の信念だけが常に底流に流れております。今年4月4日より5月8日迄4度目の海外演奏旅行として、ヨーロッパ演奏旅行を行ない、各国の人々と合唱を通じた心と心のふれ合いを部員各々は深く胸に刻み込んでまいりました。

今後も、林雄一郎先生、北村協一先生、畑中良輔先生、大久保昭男先生の御指導のもとに、より輝かしい歴史の一ページを飾るべく努力するつもりでございます。

リヒアルト・ワグナーを冠した我々のクラブも今年で創立73周年を迎え、ワグネリアンである我々はその伝統を受けつぎ、新たな前進を続けるべく努力してまいりました。そこには木下保、畑中良輔先生をはじめ、大久保昭男先生、三浦洋一先生、北村協一先生方の常に変わらぬワグネリアンに対する暖い愛情があったからに他なりません。百名に近い部員それぞれには、それぞれの考えがありますが、そこにおいて我々がまとまっているのは皆それぞれが音楽というものに愛情を感じているからです。そこには言葉では言表わすことのできないものがワグネルを頂点として一人一人と糸で結びつきあっているようです。このように書いていますと、しかめっつらをした人間の集合体なのです。女子大とのハイキングになれば皆奮って参加しゲームに打ち興じたり、中国研究会、その他色々のゲームに授業の合間(?)を縫ってかけつけるのです。そしてしっかりと気分転換をしてクラブの練習に出るという若さにあふれた毎日を送っているのです。これからも、ワグネリアンは音楽に対して常に新鮮な気持をもってワグネルトーンと言うものを作りあげるべく前進して行きたいと思っておりますので皆様方の遠慮ない御批判と私たちに對する変わらぬ御声援をお願い致します。

東西四大学合唱演奏史

第1回	昭和27年9月21日	同志社栄光館	第13回	昭和39年6月13日	京都会館ホール
	9月22日	大阪産経ホール		14日	大阪フェスティバルホール
	合同演奏	「Ave Maria」「愛でし友」		合同演奏	「Credo」
第2回	昭和28年9月20日	日本青年館ホール	第14回	昭和40年6月19日	東京文化会館
	合同演奏	「いざ起て戦人よ」「おお美しき星よ」「希望の島」		20日	東京文化会館
				合同演奏	「蛙の歌」
第3回	昭和29年9月18日	同志社栄光館	第15回	昭和41年6月13日	京都会館ホール
	19日	大阪産経ホール		14日	大阪フェスティバルホール
	合同演奏	「Zum Gloria」「Zum Sanctus」「秋のピエロ」		合同演奏	「枯木と太陽の歌」
第4回	昭和30年9月18日	日本青年館ホール	第16回	昭和42年6月24日	東京文化会館
	合同演奏	「Die Nacht」シュベルト「詩篇」103篇 Wedianita		25日	東京文化会館
				合同演奏	歌劇『フィデリオ』より「囚人の合唱」
第5回	昭和31年9月15日	宝塚大劇場			歌劇『さまよえるオランダ人』より「水夫の合唱」「幽霊船の合唱」
	16日	同志社栄光館	第17回	昭和43年6月22日	京都会館ホール
第6回	昭和32年6月23日	日本青年館ホール		23日	大阪フェスティバルホール
	合同演奏	「春が来たかと」「ふるさと」		合同演奏	「阿波祈禱文」「黙示」
第7回	昭和33年6月21日	同志社栄光館	第18回	昭和44年6月22日	東京文化会館
	22日	大阪毎日ホール		23日	東京文化会館
	合同演奏	「Rock a my soul」「What kind a shoes」「Never said a mumbarin'word」「Joshua fit de battle of Jericho」		合同演奏	「デュオパのミサ」より「Kyrie」「Credo」「Agnus Dei」
第8回	昭和34年6月21日	共立講堂	第19回	昭和45年10月26日	大阪フェスティバルホール
	合同演奏	山田耕筈作品集「からたちの花」「待ちぼうけ」「あわて床屋」「ベチカ」		27日	同志社大学学生会館ホール
				合同演奏	「海の構図」
第9回	昭和35年6月25日	京都会館ホール	第20回	昭和46年6月26日	東京文化会館
	26日	大阪フェスティバルホール		27日	東京文化会館
	合同演奏	「兵士の合唱」「巡礼の合唱」		合同演奏	「Hymne An Die Musik」
第10回	昭和36年6月17日	東京文化会館	第21回	昭和46年7月1日	京都会館ホール
	18日	東京文化会館		2日	大阪フェスティバルホール
	合同演奏	「枯木と太陽の歌」		合同演奏	歌劇『フィデリオ』より「囚人の合唱」
第11回	昭和37年6月23日	京都会館ホール			歌劇『さまよえるオランダ人』より「水夫の合唱」「幽霊船の合唱」
	24日	大阪フェスティバルホール			
	合同演奏	「Listen to de Lambs」			
第12回	昭和38年6月22日	東京文化会館			
	23日	東京文化会館			
	合同演奏	「若者の歌」			